

## 青年期後期の親からの心理的分離を測定する尺度の作成と検討 (1)

上地 雄一郎 \*上地 玲子

### 要約

Hoffmanの心理的分離尺度 (PSI) の日本版の問題点を改善するために、PSIの下位尺度を5つの下位尺度に細分化しなおし、項目数を少なくし、改訂版PSI (PSI-R) を作成した。PSI-Rの項目に対して主成分分析を行って項目を選定した結果、5つの成分が抽出され、これらは親からの機能的自立、親への不信・恨みの少なさ、親への同調・気遣いの少なさ、承認・支持への欲求の少なさ、親の依存・期待への嫌悪の少なさとして解釈された。下位尺度の信頼性係数は0.913~0.754であった。PSIとの相関、自己実現尺度 (SEAS) との相関を通して、PSI-Rの妥当性を検討したところ、PSIの下位尺度とはおおむね予想された高い相関が見られ、SEASの下位尺度との間にもいくつかの相関が見られた。

キーワード：PSI、改訂版PSI、主成分分析、信頼性、妥当性

### 1. 問題と目的

青年期における親からの分離・個体化 (separation-individuation) の過程は、青年の適応とも関連する重要な問題であり、青年の心理的問題の多くがこの過程と関連して生じていると言える。ただ、この問題についての研究は、主に心理的問題を抱えた青年についての事例研究を通して行われてきた。比較的健康的な青年を含めた調査的研究は十分とは言えない。その理由の一つは、適切な心理学的尺度が不足していることであろう。青年期の心理的分離 (psychological separation) の諸側面を測定する尺度で定評のあるものとしては、Hoffman(1984)のPsychological Separation Inventory (PSI)、Hansburg(1972,1980)のSeparation Anxiety Test (SAT)、Levineら (1986,1993)のSeparation-Individuation Test of Adolescence (SITA)がある。HoffmanのPSIは、対父親・対母親それぞれ69項目からなる質問紙であり、青年期後期の親からの心理的分離を「機能面での自立(functional independence)」、「態度面での自立(attitudinal independence)」、「情緒面での自立(emotional independence)」、「葛藤面での自立(conflictual independence)」の4つの側面で測定する。HansburgのSATは、分離場面を描いた12の絵に反応させる形式の、半構造化された投影法的尺度である。また、LevineらのSITAは、Mahlerの分離・個体化理論に基づいた86項目の質問紙であり、分離不安 (separation anxiety)、呑み込まれ不安 (engulfment anxiety)、保護希求 (nurturance seeking)、仲間との癒着(peer enmeshment)、教師との癒着(teacher enmeshment)、練習一映し返し(practicing-mirroring)、欲求否認(need denial)、拒否の予期(rejection expectancy)、健康的分離(healthy separation)という9の下位尺度に分かれている。SATは分離不安に焦点を当てており、SITAは親子関係以外の領域をも含んでおり、単純に親からの心理的分離度を測定し

\*岡山県立大学 学生相談室

たい場合には、PSIが便利である。

すでに上地ら（1987）、中丸ら（1987）は、日本版PSIを作成し、因子構造の検討を行った。その結果、Hoffmanの尺度構成はほぼ妥当であることが確認された。しかし、その過程で以下のような点が問題となった。PSIでは、機能的・情緒的に親に依存せず、価値観が親と異なり、親との葛藤が少ないほど親からの分離が進んでいるとみなす。しかし、例えば、親と価値観が異なるほど内的な分離が進んでいるといえるのか。親から受け継いだ価値観を吟味し受け取り直した後、結果的に親と似た価値観になる場合もあるだろう。実際、Hoffman自身の調査（1984）でも、態度面での自立と適応との間に負の相関が見いだされている。すなわち、親と価値観が似ている人の方が適応が良好であるという結果が出ている。また、両親に機能的に依存していないからといって親との内的な分離が達成されているとは限らない。むしろ親と内的に分離できていないために親を避け、親の手を借りないようにしている場合もあるかもしれない。さらに、葛藤面の自立についていうと、この下位尺度は、概念的にもう少し細分化できるのではないか。

そこで、筆者らは、PSIよりも情緒的・内面的な分離に重点をおき、PSIよりも簡便な心理的分離尺度を作成することにした。PSIの5つの下位尺度のうち「態度面での自立」を除き、残りの4つを次のように分類し直した。そして、以下の5側面で心理的自立を測定することにした。（1）親からの機能的自立：親から機能的に自立しており、親の助言や指示を期待しない。（2）親の依存・期待への嫌悪の少なさ：親の子どもに対する依存・期待に対して、のみ込まれる不安から強い嫌悪感を感じる事が少ない。（3）親から承認・支持を求める欲求の少なさ：親に対して理解、共感、支持などを期待せず、親の応答の不備に対して失望することが少ない。（4）親への不信・恨みの少なさ：これまでの親子関係の問題による親への憎しみや恨みが少ない。（5）親への同調と気遣いの少なさ：親の期待や願望と一体化・同調することがなく、親の意向や感情を過度に気にすることはない。

今回の研究では、予備的調査として、これらの5側面を測定する質問紙尺度を作成し、上記のような構成概念が妥当かどうかを統計的に検討することにした。

## 2. 方法

（1）心理的分離尺度：上記の5側面を測定すると予想される質問項目をそれぞれ10個ずつ用意し、対父親50項目、対母親50項目、合計100項目からなる質問紙を作成した。各項目は、「めったにない」（3点）、「ときたまある」（2点）、「たびたびある」（1点）、「いつもそうだ」（0点）の4件法で回答させ、自立度が高い方向に得点が高くなるようにした。これを仮に「改訂版心理的分離尺度」（Psychological Separation Inventory Revised; PSI-R）と呼ぶことにする。

（2）分析方法：統計解析ソフトSPSSを使い、以下の分析を行った。①分析1：PSI-Rの項目の主成分分析と項目の選定

②分析2：PSI-Rの下位尺度の信頼性の検討（Cronbachの $\alpha$ 係数）

③分析3：他の尺度との相関による妥当性の検討：日本版PSI（上地ら,1987）および自己実現尺度SEAS（村山ら,1982,1983,1984）との相関を検討した。

（3）被検者：

- ①分析1：岡山県内の国立・私立大学1～4年生268名（男性119名、女性149名；1年生133名、2年生93名、3年生38名、4年生4名；片親家庭を含む）
- ②分析2：分析1の被験者のデータを用いた。
- ③分析3：岡山県内の公立短期大学1・2年生56名（男子2名、女子54名；1年生20名、2年生36名；片親家庭を含む）

### 3. 結果と考察

#### （1）主成分分析

PSI-Rの各項目を変数とし、対父親項目群および対母親項目群ごとに、主成分分析（バリマックス回転）を行った。累積寄与率が50%を越える点を基準にして成分数を定めると、対母親項目は5成分が妥当と思われた。対父親項目は4成分でも説明が可能であるが、4成分にすると各成分に属する項目数が増え、成分の解釈が難しかった。そこで、対父親項目群についても、対母親項目群と同じように5成分とした。ただ、①どの成分にも負荷の低い項目、②母親と父親で負荷の高い成分が異なる項目、③予想とは異なる成分に負荷を示す項目が見られた。これらの項目を削除し、残った40項目について、改めて5成分と指定して主成分分析（バリマックス回転）を行った。その結果を表1・2に示す。

母親項目の第1成分と父親項目の第2成分は「親からの機能的自立」（10項目）、母親の第2成分と父親の第1成分は「親への不信・恨みの少なさ」（9項目）、母親と父親の第3成分は「親への同調・気遣いの少なさ」（7項目）、母親と父親の第4成分は「承認・支持への欲求の少なさ」（8項目）、母親と父親の第5成分は「親の依存・期待への嫌悪の少なさ」（6項目）と解釈できる。これらの項目のなかには、複数の成分に高い負荷を示し、単純構造を満たさない項目も見られるが、そのまま採用した。最終的な項目を表3に示す。

表1：母親項目の主成分分析

項 目	1	2	3	4	5
5. 辛いことや苦しいことを母に話す	.745	-.102	-.008	.128	-.139
10. 母の存在なしでは生きていられないと思う	.436	-.144	.317	.321	-.078
15. 分からないことがあると、母に相談する	.818	-.069	.111	-.005	-.044
20. 困ったことがあると、母に助けてもらう	.816	-.136	.083	.018	.038
25. 迷っているとき、母の意見や判断を頼りにする	.735	-.157	.274	.031	.010
30. 不安なことや心配なことがあると、母に相談する	.868	-.066	.067	.032	-.028
35. 何かで困ったら母に助けてもらえると期待している	.618	-.100	.126	.027	.138
40. 何かするとき母の意見を参考にする	.755	-.099	.186	.053	.081
45. 自分で処理できない問題は母に助けてもらう	.698	-.020	.112	.029	.113
50. 母の助けなしに一人で生きるの不安だと感じる	.401	-.103	.308	.291	.054
2. 母と対立しているように感じる	-.142	.662	-.015	.187	.159
7. 母に対してとても腹が立つことがある	-.078	.622	-.032	.239	.252
17. 母のことを恥ずかしいと感じる	-.010	.695	-.053	-.074	.003
22. 母が私を批判すると腹が立つ	-.004	.447	.101	.287	.397
27. 母の子どもとして生まれたくなかったと思う	-.106	.788	.044	-.051	-.006
32. 私の問題の多くが母のせいで起きていると思う	-.094	.626	-.060	.043	.175
37. 母を信頼することができない	-.149	.800	-.006	-.009	.087
42. 母に対して憎しみや恨みを感じる	-.096	.730	-.048	.129	.074
47. 過去に母に言われたことやされたことが許せない	-.102	.516	.114	.178	.158
4. 母の期待を裏切らないように生きている	.128	-.099	.710	.130	.138
9. 母の言うことに逆らわないようにしている	.040	.158	.707	-.053	-.037
19. 母からどんな反応が返ってくるか気にしている	.236	.195	.553	.050	.190
29. 何かするとき、それを母がどう思うかが気になる	.283	.104	.589	.049	.125
39. 母に心配をかけないように努めている	.058	-.147	.704	.089	.086
44. 母の嫌がることをしていると後ろめた気持ちになる	.239	-.104	.649	.087	.104
49. 母の感情を傷つけないように注意している	.086	-.031	.728	.120	.123
3. 母が私の気持ちを分かってくれないと不満だ	.103	.286	.080	.541	.314
8. 母が私のことを真剣に考えてくれないと不満だ	.136	.062	.118	.663	.094
23. 母が私の立場に立って考えてくれないと不満だ	.123	.161	.153	.478	.448
28. 母が私の話を親身に聞いてくれないと不満だ	.248	-.008	.113	.584	.233
33. 母は私のことに関心がなさすぎると思う	-.082	.425	-.123	.490	-.171
38. 母が私のことを正しく理解してくれないと不満だ	.226	.149	.120	.497	.396
43. 母にもっと私のことを気にかけてほしいと思う	-.018	.040	.126	.738	-.103
48. 母がもっと私のことを心配してくれたらいいのと思う	-.073	.117	-.015	.741	-.119
1. 母がこんなに過保護でなければいいのと思う	-.038	.030	.032	-.029	.707
6. 母が私を思い通りにさせようとするのがいやだ	-.058	.466	.148	.061	.530
21. 母は私に期待しすぎていると思う	.063	.065	.243	.058	.610
31. 母がもっと私を信じてくれたらいいのと思う	-.130	.262	.180	.225	.611
41. 母は私を心の支えにしすぎていると思う	.168	.049	.086	-.096	.507
46. 母が私を自分の所有物のように思っているのがいやだ	-.027	.391	-.037	.068	.579
<b>固有値</b>	<b>5.506</b>	<b>4.967</b>	<b>3.721</b>	<b>3.452</b>	<b>3.184</b>
<b>寄与率</b>	<b>13.756</b>	<b>12.418</b>	<b>9.302</b>	<b>8.631</b>	<b>7.960</b>
<b>累積寄与率</b>	<b>13.756</b>	<b>26.183</b>	<b>35.485</b>	<b>44.116</b>	<b>52.076</b>

(n=267)

表2：父親項目の主成分分析

項 目	1	2	3	4	5
2. 父と対立しているように感じる	.753	-.113	-.103	.234	.143
7. 父に対してとても腹が立つことがある	.726	-.111	-.110	.230	.143
17. 父のことを恥ずかしいと感じる	.719	-.088	-.009	.053	-.024
22. 父が私を批判すると腹が立つ	.552	-.029	-.031	.374	.314
27. 父の子どもとして生まれたくなかったと思う	.838	-.089	.012	.010	.020
32. 私の問題の多くが父のせいで起きていると思う	.708	-.072	.013	.024	.185
37. 父を信頼することができない	.864	-.174	-.074	.093	-.014
42. 父に対して憎しみや恨みを感じる	.809	-.128	.037	.114	-.019
47. 過去に父に言われたことやされたことが許せない	.645	-.031	-.035	.114	.347
5. 辛いことや苦しいことを父に話す	-.052	.729	.044	-.058	-.058
10. 父の存在なしでは生きていられないと思う	-.243	.430	.388	.053	.032
15. 分からないことがあると、父に相談する	-.043	.790	.100	-.004	.078
20. 困ったことがあると、父に助けをもらう	-.149	.793	.146	.060	.133
25. 迷っているとき、父の意見や判断を頼りにする	-.108	.779	.316	.118	.059
30. 不安なことや心配なことがあると、父に相談する	-.079	.829	.116	.058	-.051
35. 何かで困ったら父に助けをもらえると期待している	-.104	.647	.318	.144	.088
40. 何かするとき父の意見を参考にする	-.097	.761	.319	.056	.038
45. 自分で処理できない問題は父に助けをもらう	-.101	.727	.241	.089	.031
50. 父の助けなしに一人で生きるの不安だと感じる	-.168	.531	.353	.187	.031
4. 父の期待を裏切らないように生きている	-.056	.266	.714	.111	.076
9. 父の言うことに逆らわないようにしている	-.014	.295	.636	.082	.048
19. 父からどんな反応が返ってくるか気にしている	.062	.176	.547	.252	.310
29. 何かするとき、それを父がどう思うかが気になる	.027	.312	.572	.266	.322
39. 父に心配をかけないように努めている	-.076	.226	.805	.031	.027
44. 父の嫌がることをしていると後ろめたい気持ちになる	-.092	.272	.708	.245	.165
49. 父の感情を傷つけないように注意している	.099	.189	.782	.073	.049
3. 父が私の気持ちを分かってくれないと不満だ	.164	.195	.076	.615	.322
8. 父が私のことを真剣に考えてくれないと不満だ	.172	.191	.144	.610	.218
23. 父が私の立場に立って考えてくれないと不満だ	.242	.181	.024	.649	.407
28. 父が私の話を親身に聞いてくれないと不満だ	.149	.230	.072	.702	.196
33. 父は私のことに関心がなさすぎると思う	.280	-.201	-.061	.504	-.285
38. 父が私のことを正しく理解してくれないと不満だ	.261	.202	.131	.636	.275
43. 父にもっと私のことを気にかけてほしいと思う	-.014	-.055	.325	.719	-.165
48. 父がもっと私のことを心配してくれたらいいのに...	.024	-.067	.236	.738	-.097
1. 父がこんなに過保護でなければいいのと思う	.132	.158	-.010	.039	.639
6. 父が私を思い通りにさせようとするのがいやだ	.533	-.075	.042	.119	.581
21. 父は私に期待しすぎていると思う	.115	-.020	.227	.125	.644
31. 父がもっと私を信じてくれたらいいのと思う	.435	-.018	.213	.427	.416
41. 父は私を心の支えにしすぎていると思う	.025	.036	.249	.091	.445
46. 父が私を自分の所有物のように思っているのがいやだ	.459	-.059	.052	.050	.505
固有値	6.133	5.896	4.394	4.208	2.916
寄与率	15.332	14.714	10.986	10.520	7.289
累積寄与率	15.332	30.072	41.058	51.579	58.868

(n=267)

表3：PSI-Rの項目（数字は調査時の項目番号）

親からの機能的自立（10項目）
5. 辛いことや苦しいことを母・父に話す 10. 母・父の存在なしでは生きていけないと思う 15. 分からないことがあると、母・父に相談する 20. 困ったことがあると、母・父に助けをもらう 25. 迷っているとき、母・父の意見や判断を頼りにする 30. 不安なことや心配なことがあると、母・父に相談する 35. 何かで困ったら母・父に助けをもらえると期待している 40. 何かするとき母・父の意見を参考にする 45. 自分で処理できない問題は母・父に助けをもらう 50. 母・父の助けなしに一人で生きるのは不安だと感じる
親への不信・恨みの少なさ（9項目）
2. 母・父と対立しているように感じる 7. 母・父に対してとても腹が立つことがある 17. 母・父のことを恥ずかしいと感じる 22. 母・父が私を批判すると腹が立つ 27. 母・父の子どもとして生まれたくなかったと思う 32. 私の問題の多くが母・父のせいで起きていると思う 37. 母・父を信頼することができない 42. 母・父に対して憎しみや恨みを感じる 47. 過去に母・父に言われたことやされたことが許せない
親への同調・気遣いの少なさ（7項目）
4. 母・父の期待を裏切らないように生きている 9. 母・父の言うことに逆らわないようにしている 19. 母・父からどんな反応が返ってくるか気にしている 29. 何かするとき、それを母・父がどう思うかが気になる 39. 母・父に心配をかけないように努めている 44. 母・父の嫌がることをしていると後ろめたい気持ちになる 49. 母・父の感情を傷つけないように注意している
承認・支持への欲求の少なさ（8項目）
3. 母・父が私の気持ちを分かってくれないと不満だ 8. 母・父が私のことを真剣に考えてくれないと不満だ 23. 母・父が私の立場に立って考えてくれないと不満だ 28. 母・父が私の話を親身に聞いてくれないと不満だ 33. 母・父は私のことに関心がなさすぎると思う 38. 母・父が私のことを正しく理解してくれないと不満だ 43. 母・父にもっと私のことを気にかけてほしいと思う 48. 母・父がもっと私のことを心配してくれたらいいのと思う
親の依存・期待への嫌悪の少なさ（6項目）
1. 母・父がこんなに過保護でなければいいのと思う 6. 母・父が私を思い通りにさせようとするのがいやだ 21. 母・父は私に期待しすぎていると思う 31. 母・父がもっと私を信じてくれたらいいのと思う 41. 母・父は私を心の支えにしすぎていると思う 46. 母・父が私を自分の所有物のように思っているのがいやだ

（2）信頼性の検討

分析1において構成されたPSI-Rの5つの下位尺度についてCronbachの $\alpha$ 係数を算出した結果を表4に示す。 $\alpha$ 係数は0.913~0.754の範囲に収まっており、信頼性は高いと判断される。

表4：PSI-R下位尺度の信頼性（Cronbach  $\alpha$ ）

下位尺度	機能的自立	不信・恨みの少なさ	同調・気遣いの少なさ	承認・支持への欲求の少なさ	依存・期待への嫌悪の少なさ
母親項目	. 896	. 845	. 825	. 801	. 754
父親項目	. 913	. 909	. 882	. 848	. 764

（母親項目 N = 267；父親項目 N = 264）

（3）日本版PSIとの相関

PSI-Rの下位尺度ごとに各項目の素点を合計して合計得点を算出した。各下位尺度の得点は下記の範囲にわたることになる。①親からの機能的自立：0~30点、②親への不信・恨みの少なさ：0~27点、③親への同調・気遣いの少なさ：0~21点、④親の承認・支持を求める欲求の少なさ：0~24点、⑤親の期待・依存への嫌悪の少なさ：0~18点。日本版PSIの下位尺度についても、各項目の素点を合計して下位尺度得点を算出した。PSI-RについてもPSIについても、親からの分離度が高いほど得点が高くなるように得点化したことになる。次に、PSI-Rと日本版PSIの各下位尺度同士の相関係数（Pearsonの積率相関係数 $r$ ）を算出した（散布図を検討した結果、Pearsonの $r$ で問題はないと思われた）。その結果を表5に示す。PSI-Rの「機能的自立」における分離度とPSIの「機能面および情緒面での自立」は、母親においても父親においても高い相関を示し、予想通りの結果であった。また、PSI-Rの「不信・恨み」、「同調・気遣い」、「承認・支持」、「期待への嫌悪」の下位尺度における分離度は、父親における「同調・気遣い」を除いて、PSIの「葛藤面での自立」と高い相関を示した。PSI-Rのこれらの4尺度は、PSIの葛藤面での自立とほぼ同じ側面を測定していると言える。

表5：PSI-Rの下位尺度とPSIの下位尺度との相関

（4）自己実現尺度SEASとの相関

PSI-Rの下位尺度ごとの合計得点とSEASの下位尺度の得点との相関係数（Pearsonの $r$ ）を算出した。仮説としては、親から心理的に分離できている人の方が自己実現度も高くなるであろうと予想していた。有意な相関が見られた側面を表6に示す。「母親への不信・恨みの少なさ」「母親からの承認・支持

		PSI-R					
		対 母 親					
		機能的自立	不信・恨みの少なさ	同調・気遣いの少なさ	承認・支持への欲求の少なさ	依存・期待への嫌悪の少なさ	
ホ ウ マ ン P S I	対 母 親	機能面自立	0.660**	0.177	0.433**	0.206	0.211
		情緒面自立	0.682**	0.104	0.540**	0.209	0.129
		葛藤面自立	0.016	0.748**	0.420**	0.555**	0.802**
		態度面自立	0.373**	0.088	-0.036	0.179	0.016
			対 父 親				
			機能的自立	不信・恨みの少なさ	同調・気遣いの少なさ	承認・支持への欲求の少なさ	依存・期待への嫌悪の少なさ
	対 父 親	機能面自立	0.607**	-0.314*	0.440**	0.013	-0.058
		情緒面自立	0.569**	-0.339*	0.576**	0.013	0.062
葛藤面自立		-0.182	0.660**	0.094	0.470**	0.687*	
態度面自立		0.500**	-0.323*	0.295*	-0.170	-0.081	

\*：P<.05 \*\*：P<.01（対母親項目 n=56；対父親項目 n=55）

への欲求の少なさ」における分離度と、「率直な自己表現」との間に負の相関が見られる。すなわち母親に不信・恨みがなく母親の承認・支持を求めている人の方が率直な自己表現をしない傾向がある、逆に言うと、母親に不信・恨みがあり母親の承認・支持を強く求めている人の方が率直な自己表現をする傾向があるということである。この結果の解釈としては、PSI-Rのこの2つの下位尺度か、SEASの「率直な自己表現」の下位尺度に問題があることも考えられる。SEASのこの「率直な自己表現」が人格発達の成熟した段階を示すものだとするなら、PSI-Rの上記の2下位尺度は、親からの本当の意味での分離を測定できない可能性がある。また、これがもしSEASの方の問題であるなら、次のようなことも考えられる。率直な自己表現といっても内容が問題であり、相手や状況をも考慮した、自分も相手も大切にする自己表現でなければ、成熟したものとは言えないであろう。問題は、SEASのこの下位尺度によって、そうした成熟した自己表現が測れているかどうかということである。

次に、父親に「機能的に依存していない」ことと「自己主張」との間に負の相関が見られた。これも、PSI-RあるいはSEASの問題によるものとも考えられるが、別の視点から考えると、青年期後期という段階の特質によるものかもしれない。母親からの分離・個体化と父親からの分離・個体化は同時並行的に進むのではない。幼児期においても青年期においても、子どもが母親から分離していく際に、一時的に父親への接近が見られ、父親が自立の支えとなり、母親からの分離を容易にするという現象が指摘されている(牛島,1988)。また、鶴田(1994)によれば、大学生の時期は、社会的自立を前にして父親との関係が重要になる時期と考えられる。そのようなわけで、この段階では、むしろ父親に依存できている人の方が自己主張が容易なのかもしれない。

表6: PSI-Rの下位尺度とSEASの下位尺度との相関(有意であった点のみ)

		自己実現尺度			
		現在の自分の肯定	健康な達成志向	自己主張	率直な自己表現
PSI-R 対母親	機能的自立				
	不信・恨みの少なさ	0.281*			-0.339*
	同調・気遣いの少なさ				
	承認・支持欲求の少なさ				
PSI-R 対父親	期待への嫌悪の少なさ				-0.270*
	機能的自立			-0.289*	
	不信・恨みの少なさ	0.335*	0.275*	0.292*	
	同調・気遣いの少なさ				
	承認・支持欲求の少なさ		0.305*		
	期待への嫌悪の少なさ	0.371*		0.296*	

\*: P<.05

(母親項目 n=56; 父親項目 n=55)

#### 4. まとめ

Hoffman(1984)のPSIの日本版をもとに、より簡便な心理的分離尺度PSI-Rの作成を試みた。PSI-Rの下位尺度の構成はほぼ妥

当と思われ、PSI-RとPSIの間にも納得できる相関が見られた。しかし、さらに妥当性の検討を積み重ねないと、PSI-Rの下位尺度の意味や妥当性は明らかにならない。また、この尺度で測定された分離(自立)度の意味が、対母親と対父親では異なることも予想され、今後はこうした点の検討を進めていきたいと思う。



<付記>本研究は、平成10年度岡山県立大学特別研究事業費の助成を受けている。

<謝辞>本調査にご協力いただきました川崎医療福祉大学：島田 修先生・保野孝弘先生、岡山理科大学：松本卓三先生・三島勝正先生に感謝いたします。

## 文献

- 1)Hansburg,H.G.(1972): Adolescent separation anxiety(Vol.1). New York:Krieger.
- 2)Hansburg,H.G.(1980): Adolescent separation anxiety(Vol.2). New York:Krieger.
- 3)Hoffman,J.F.(1984): Psychological separation of late adolescents from their parents. *Journal of Counseling Psychology*, Vol.31(2), 170-178.
- 4)上地雄一郎ら(1987)：大学生の心理的自立度の測定(1): Hoffmanの尺度の適用と検討.総合保健科学, Vol.3, 63-68.
- 5)Levine,J.B. & Saintonge S.(1986): The separation-individuation test of adolescence. *Journal of Personality Assessment*, 50(1), 123-137.
- 6)Levine,J.B. et al.(1993): Psychometric properties of the separation-individuation test of adolescence within a clinical population. *Journal of Clinical Psychology*, Vol.49(4), 492-507.
- 7)村山正治ら(1982)：自己実現尺度で測る精神的健康(1).健康科学,4,177-184.
- 8)村山正治ら(1983)：自己実現尺度で測る精神的健康(2).健康科学, 5,1-9.
- 9)村山正治ら(1984)：自己実現尺度で測る精神的健康(3)－項目とフォームの決定－.健康科学, 6, 45-57.
- 10)中丸澄子ら(1987)：大学生の心理的自立度の測定(2):Hoffmanの尺度構成についての補足的検討.総合保健科学, Vol.3, 69-77.
- 11)鶴田和美(1994)：大学生の個別相談事例から見た卒業期の意味. 心理臨床学研究, Vol.12(2), 97-108.
- 12)牛島定信(1988)：思春期の対象関係論. 金剛出版.

## ABSTRACT

Development and Validation of a Scale Measuring Psychological Separation of Late Adolescents from Their Parents(1)

Yuichiro Kamiji(Okayama Prefectural University-Junior College) and  
Reiko Kamiji(Okayama Prefectural University-Student Counseling Center)

In this study, we revised the Japanese version of Hoffman's Psychological Separation Inventory. Our revised version of PSI(PSI-R) consists of five subscales. The five subscales are : functional independence, little resentment and distrust, little compliance and concern, little need for approval and support , little disgust against parents' dependence and expectation.

Factor analysis confirmed the construction of five subscales. Validity and reliability of the PSI-R were examined through its reliability coefficient and its correlation with the PSI, respectively. Cronbach's coefficient alpha of the five subscales ranged from 0.754 to 0.913. The Functional Independence subscale of the PSI-R correlated significantly with the Functional and Emotional Independence subscales of the PSI. The other four subscales of the PSI-R correlated significantly with the Conflictual Independence subscale of the PSI.

Key Words : PSI, PSI-R, Factor Analysis, validity, reliability

〔平成10年10月30日受付〕  
〔平成10年12月25日受理〕